付篇１　点描　海会寺・一岡神社

水　野　正　好

１　海会寺の寺名と市と社と驛家と

「海会寺」、その名を聞くと私の想念に登場してくるのは、音を等しくする「海会塔」という言葉である。海会塔というのは衆僧の遺骨を納める塔である。いくつもの川・河が海に会合するように、多くの僧の遺骨を一所に合祀する塔をいうのである。『禅林僧宝伝』第三十、黄龍仏寿清禅师の条に「公遺言して骨石を海会に蔵せしむ。生死も衆を隔てざることを示すなり」と記されているように、衆を隔てず多くの人々が会合、会同する、そういった内容が海会という言葉の語義なのである。言うまでもなく、古代寺院には寺号と法号という二つの名がある。荒陵山四天王寺は荒陵里に営まれたところから荒陵山の寺号がつき四天王を奉斉する所から四天王寺という法号がつくのである。飛鳥寺も同様であり元興寺（法興寺）の法号、斑鳩寺も同様法隆寺の法号をもつのである。そうした目で見ると海会寺という名は法号であり、寺号は一岡寺といったのではないかと考えるのである。

ところで、元興寺や法隆寺の名は仏法最初の寺、仏法興隆の寺といった原義に基いて名づけられているが、四天王寺などは祈る仏に基く名である。では「海会寺」がもつ衆人の衆を隔てず集うという原義は何処からくるのであらうか。ここで想起されるのが地名「一岡」である。一の岡・二の岡・三の岡といった岡算えの「一岡」である可能性もないではないが、近接して「市場」の地名もあり、そうした意味では「市丘＝市岡」である可能性が考えられるのである。「海会」の語が衆人隔りなく集うの意であるだけに、市のたつ岡、一岡（市岡）の意が息づいてくるのである。

「海会寺」の寺名と「一岡」の地名、この二つを併せ考えると、この地は市の立つ地であり、人々の雑踏で饒わう地、そこに創建された寺ということで地名をとって「一岡寺」、法号を「海会寺」と名付ける、そうした経緯があったのではないかと推察するのである。そうした視座からするならば、この海会寺の所在地は、雄山峠越と孝子峠越の交会する地、まさに二道合一地であり、時には官衙が配置されたり、市が設営されたり、時にはこの地に根づく氏族が居を構えるなど、いずれにせよ、交会の地として重視され常々関心のもたれた地域であったことが想定されるのである。近接する市場の地名とも関連して「市」に縁りをもつ地に誕生した寺「海会寺（山）一岡寺」が今回調査された寺跡の名であった

ろうと私は考えるのである。

二道合一の地に営まれる寺は各地に見られるが、こうした「道」に係る市については、例えば『日本霊異記』に「聖武天皇御世、三野国片縣郡少川市、有一力女、為人大也、名為三野狐、力強当百人力、住少川市内、恃己力凌弊於往還商人、而取其物為業」といった記事を見るがよくそうした往還道に面する市の実際を描写しているといえるであろう。

海会寺（一岡寺か）の寺名が由来するところは、この地に「市」が営まれており、係り合う地の故にこうした寺名が起った次第を見たが、この寺と同じような性格をもつ寺例に平城京左京の東市とその北東に接する姫寺がある。東市などの市を守護する神としては、『金光寺縁起』には「東市屋市姫大明神三座、延暦十四年五月七日、贈相國冬嗣公祭宗像大神干東西市、為守護神、因号市姫、九月七日祭之」と記しており、平安京では宗像大社の市杵島姫命を祀ると説くのである。『倭訓栞』などは市姫は大山祇命の女、大市姫かとも説くが、これらは共に「市姫」の神と語の合う姫神を宛てているのであって、平城京東市の場合も市内、もしくは近隣に「市姫社」や「市姫寺」が伴っていたと見てよい状況にあると言えよう。市と寺と社が相互に関連する存在、三身一体ともいうべきあり方が辿れるのである。このように見てくると、この海会寺の場合、男里（一岡）市、海会寺、一岡神社の三者がそれぞれ、市と寺と社といった関係で明白に把握されることになるのである。平城京の東市に伴う姫寺は、飛鳥・白鳳時代この地に存続した寺院であり、屋瓦に「土寺」の刻銘を見る所からすれば「土師寺」と呼ばれ、土師氏創建の寺院であった可能性がつよく、平城京造営後、東市・市姫社の設置に伴い、土師寺から姫寺（市姫寺）へと性格を換えていくといった経緯がたどれるのではないかと思料されるのである。同様、海会寺の場合も、海会寺自体は白鳳時代の建立であり、この地にある豪族の氏寺として創り出されるのであるが、市や社との間に密接な関係をもつに至ると考えてよいであらう。

想えば、『延喜式』には和泉国に所在する驛家を挙げて日部驛、呼吸驛の存在を説く。三十里の間隔をあけて驛家を置くとされるだけに大鳥郡日下部から南海道を南下したこの地がその比定の候補地にあがるであろう。呼吸はコオ、またはオオと発音すべきであろうから「男里」が平安期には「コオノ里・オオノ里」と呼ばれていた可能性があり、しかも驛家―ウマヤは文字こそ異るものの、この地に所在する「厩戸王子」の「ウマヤ」と重さなる。こうした所見は市や寺や社の世界に加えて、さらに驛家といった南海道枢要の施設がこの地に配置されていたことをも教えるのである。この地に居を占めた氏族の名を検出する作業は後日を俟たねばならないが和泉国の極めて要衝の地として、この地を管する氏族の勢威・基盤の程がしのばれるのである。発掘調査で浮かび上った海会寺の実際は、そのかみのこの要衝の地、勢威の氏族を如実に語るものとして極めて重要な語りをもつものと

いってよいであろう。

2　海会寺の廃絶と一岡神社の再興

物部氏から岐かれた穂積氏は河内に「石切劔箭神社」を奉斉した。現在、東大阪市東石切町に鎮座する石切劔箭神社がその後嗣である。近年、この石切劔箭神社の本殿背後の地を発掘調査した結果、金堂、塔を東西に配置し北に講堂を置く伽藍が見出された。実はこの地には「法通寺＝穂積寺」の寺名が伝承されていたのであるが、その実在が確認されたこととなるのである。こうした所見からすればこの「穂積寺」廃絶後、中門に該当する地に石切劔箭神社が遷座してきたことが裏付けられる結果となったのである。一岡神社の位置もこの石切劔箭神社と相通ずる面が見られるのである。海会寺の廃絶後、その所用の礎石などを利用して金堂址の上に一岡神社が営まれているのである。石切劔箭神社、一丘神社は共に穂積寺・一岡寺に近隣して存在したのであろうが、ある時期、共に廃寺となった旧寺地、それも伽藍と深く絡みつく形で遷座しているのである。一岡神社の場合、この海会寺の伽藍をのせる寺域が丘陵地形をとり、東側に低平な地が拡り、この範囲に七世紀初葉から九世紀前葉に及ぶ集落址がひろがっている。海会寺創建前の社地はこの「一岡」の丘陵全域を占める形で存在し、やがてその社地の一部をさいて海会寺が誕生、しかし海会寺廃絶後は再び旧社地や東側の低平地を含めて一岡神社がこれを管領し、社殿を金堂址に鎮座させるといった動きがあったのであろう。

こうした一岡神社の社地拡大と遷座はいかなる背景があって成立するのであろうか。海会寺の南大門、中門、回廊、塔、金堂、講堂など七堂伽藍は七世紀後葉に完成し以後九世紀前葉の罹火廃絶までの間はその存続が確認される。海会寺の廃絶と東側の集落の終焉が相似た時期にあることは、恐らく一岡神社の命運をも含めて九世紀前葉、極めて大きな変動として把握されるものである。

この大きな衰退期の後、平安時代後期、十二世紀後半には現在の一岡神社社殿近くに、宝塔文・如来坐像文を飾る軒丸瓦を用いた瓦葺の堂が誕生するがこれも永続せず、鎌倉時代末には現在の一岡神社の西、ややはなれた塔址の南側に比較的大きな瓦葺堂舎が営なまれるといった経緯が調査の成果として得られている。そうした流れを見ると一岡神社の現位置への遷移は鎌倉時代の末葉、乃至は南北朝、恐らく十四世紀後葉、東側の比較的大きな瓦葺堂舎（本堂か）と軒並べる形で東側に移されてくるものと考えてよいのではないかと思料するのである。ここに寺・社が相並ぶ景観が生じたものと見るのである。

ところで注目されるのは一岡神社のあり様である。恐らく古代にあっては一岡神社はこの地の氏神であり、また、この地に繁栄した市神でもあったと見てよい。氏族や国

と連なる神格、神社であったこの一岡神社は、中世、この遷座の時期にはその性格を大きく変化させているのである。一岡神社の祭神は素盞嗚尊、奇稲田姫、八王子であるとされている。素盞嗚尊は牛頭天王に、奇稲田姫は婆梨采女に重さねられるのが中世の慣しであるから、本社は牛頭天王、その妃婆梨采女、その王子八王子一八将神、眷属として八萬四千六百五十四神王、それに牛頭天王と絡み合う天刑星、巨旦将来、蘇民将来といった牛頭天王を最高神とする神統譜にある神々を祀る社となっていると言えるのである。本社を説いて『和泉名所図会』は「信達牛頭天王」と記すのも、こうした背景あってのことである。

牛頭天王の信仰は、京都八坂神社（祇園感神院）を中心に近畿一円に拡っているが、この祇園から牛頭天王を勧請した社祠は各地に見られる。現在の一岡神社の称を「一岡祇園神社海会宮」と呼ぶのもそうした関連から窺うと理解がし易いであろう。

河内・石切劔箭神社も中、近世・牛頭天王を奉斉し木積宮（牛頭天王社）と称している。

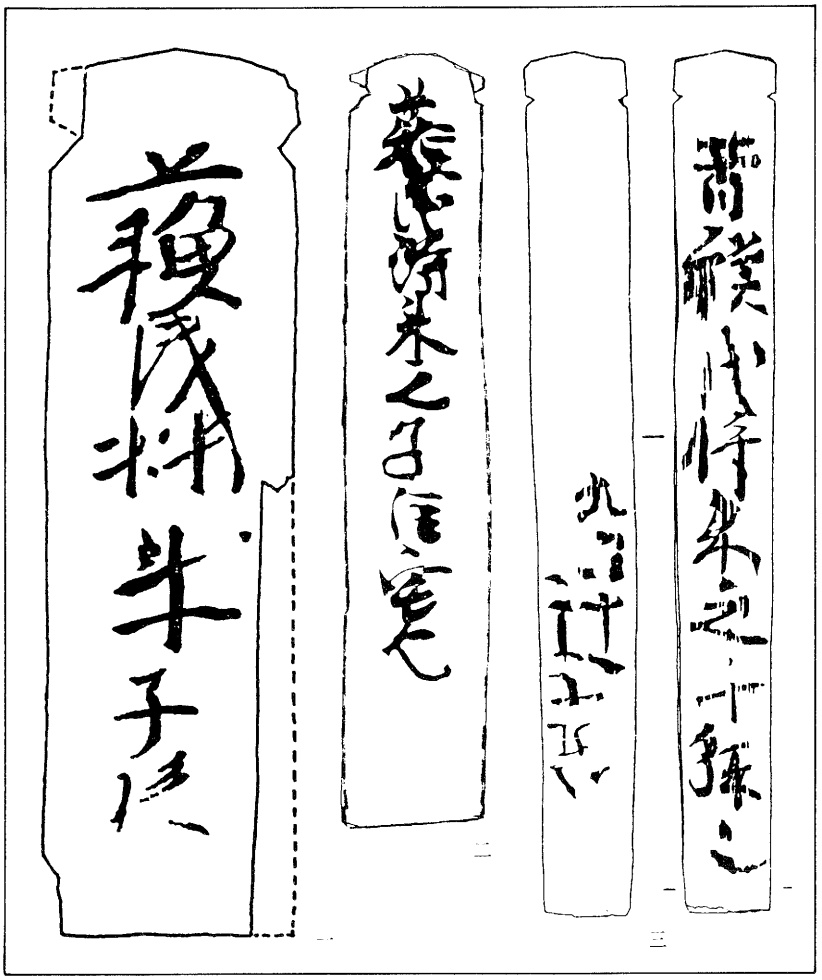

図１　石切劔箭神社西ノ辻遺跡「蘇民将来札」(左13ｃ後・中14ｃ前・右14ｃ後)

最近、石切劔箭神社周辺の発掘調査が著しく進展した結果、中・近世の集落がその姿を顕現しつつあるが、その中で特に注目されているのがこの牛頭天王と係る「蘇民将来札」の発見である。一枚だけでなく、実に数枚をこえる数の札が見出されているのである。公表された札の二・三を掲げると、一は「蘇民将来子孫」、二は「蘇民将来之子住宅也」、三は「昔蘇民将来之子孫也」といった文字がそれである。『祇園感神縁起』や『簠簋内伝』などの説くところでは、牛頭天王が南海にある婆梨采女を娶らんとして旅行く途次、長者巨旦将来に宿を請うか聞き入れられず、止むなく尋ねた貧者蘇民将来に丁重なもてなしをうけて再度旅立つ。その帰途、蘇民将来に富を与える一方、巨旦将来を倒そうとの牛頭天王の意を知り、巨旦将来宅にある娘の助命を乞う蘇民将来の願いをきき、その討滅の際この一娘のみが救い出されたと説くのである。その際牛頭天王は娘を他人と区別し救出するために「蘇民将来之子孫也」といった札を持たせよと言い、現実にこの札によって娘を識別し、救い出したと記しているのである。こうした由縁の札は災禍を免れる札として中世広く信仰を集めるのであるが、この東大阪市域西ノ辻遺跡の諸例は、近接する牛頭天王社―石切劔箭神社の頒布するところであったことが容易に推測されるのである。第一の札は十三世紀後半、二は十四世紀前半、三は十四紀後半の遺物と共伴し、その時期の札と考えてよいものである。石切劔箭神社の場合、十三世紀後半から以降、連綿として頒札していること、牛頭天王の信仰を基盤に社のイメージが与えられていることなどが如実に読みとれるのである。翻って、海会寺ゆかりの一岡神社を見ると、海会寺の旧伽藍中の塔址南側に比較的大きな瓦葺堂舎が建立される時期は鎌倉時代末、南北朝と考えられており、ほぼ十四世紀後半に当たる。この時点では金堂址に所在した小寺は廃絶しており、空地と化しているようである。いま石切劔箭神社の牛頭天王信仰を見ると十三世紀末葉から十四世紀にわたりその信仰の表現である「蘇民将来」札が最も頻繁に頒札されている状況が辿れるように、各社寺の蘇民堂や牛頭天王社が活躍するのもまたこの時期と見てよいであろう。とすれば遷座の時期は十四世紀代のことであり、西の塔址に瓦葺建物が建てられるころ、或いはそれ以前相並ぶ建物として一岡神社―牛頭天王社が建てられていくと考えてよいであろう。中世的信仰基盤に立つ一岡神社の創立、再興の経緯はこうした形で復原されるものと私は考えるのである。

3　要　　説

海会寺の創立が白鳳時代にあることは伽藍配置が法隆寺式であり、屋瓦もその創建時の資料が川原寺式・山田寺式軒丸瓦を使用することから十分に説きうるところである。この海会寺創立以前、この地は和泉・紀伊の両地を繋ぐ枢要の地、とくに孝子峠と雄山峠道に

分岐合一する地として注目され、驛家の如き官衛や呼畛郷の郷家といった諸施設が集中する要衝であった。しかもこの地を特色づける存在に「市」が存在したのではないかと考えるのである。「一岡」の名はもとより寺名である「海会」の名も、共に「市」に係わるものとみたいのである。創建の当初は本郷一呼於郷長などに代表されるこの地の氏族が深く関与する「氏寺」としての性格をもち、近接して所在したと想像される「氏神」とともにこの要衝の地を占める氏の重要な施設、地域の景観を生みだしたと思うのである。しかし、この地域に存在した驛家や官衙以上に地域の人々と強い関連をもった「市」の存在はこの地に「市岡」、「市場」といった呼称を与え、従ってこの地に創立された寺に「海会」の寺号を与える結果となったのであろう。当初、氏寺、氏社であった海会寺、一岡神社もやがては「市」の性格と重さなり合い、他地域の氏寺・氏社とは異り、市寺、市社といった性格を加えていく過程が見られたと思うのである。海会寺の伽藍を載せる一岡と呼ばれる丘は、恰も前方後方墳を思わせる観のある加工された丘陵地形をとっている。丘陵頂面の凹凸を平坦につくり、四周の出入をこのように整えたこの丘の南半、後方丘に主要伽藍を容れ、回廊が講堂にとりつく様から窺うと北方の前方丘は普通ならば僧房、食堂、大炊屋など各種の建物に宛てられるべき空間としなければならないのであるが如何せん、その丘幅が極めて狭く、果して容れ得るか否かが問われねばならない状況にある。むしろそうした施設を他に配し、北方丘を社に宛てるといった想定も配慮しておかねばならないであろう。九世紀、この海会寺が罹災し焼失するが、この時期東側の集落も終焉する事実がある。古代の政治的な要衝であったこの地の性格に大きな変化を与える事件であったと考えてよいであろう。国家的な驛舎や市、郷家といった施設が国家の衰退と相俟ってこの地から失なわれていく過程と重なり合う動向と見てよい。海会寺の再興は十二世紀、その伽藍は旧観とは無縁のもの、僅かに一堂を現一岡神社本殿近くに一金堂址辺に誕生させるにすぎないのである。古代寺院の姿を失い、新しい様相の寺が再登場するのである。宝塔や如来像文屋瓦をあげるこの堂の姿はその象徴と見てよい。こうした文様の屋瓦をもつ寺院は和泉に折々に見られるが京都や奈良の寺にもあり、本・末寺関係の中で理解する必要があるであろう。南都北嶺の諸寺を本寺とし、和泉の海会寺を含む諸寺が末寺となる形である。こうした本末関係をふまえて十四世紀、時に強く根づいた牛頭天王信仰がこの地の一岡神社を再誕させるのである。氏や政治といった古代的な枠組を離れ、新しく中世的枠組を具えた社一牛頭天王一岡神社の成立が見られるのである。近隣を結ぶ、庶人を結ぶ紐帯としての一岡神社の姿が辿られるのであり、その基盤の強固さが一岡神社を今日までのこして来た根源となることが理解されるであろう。一岡神社・海会寺、両者がこの地にあって織りなした模様はかくにも興味ぶかいものがあるのである。